

愛好家の存在を意識させ ギャンブラーへの潜在的態度を肯定化できるか Awareness of Recreational Gamblers Is Effective to Change Implicit Attitudes Towards Gamblers Positively

清水 佑輔[†], 岡田 謙介[†], 唐沢 かおり[†]
Yuho Shimizu, Kensuke Okada, Kaori Karasawa

[†] 東京大学

The University of Tokyo
yuhos1120mizu@gmail.com

概要

ギャンブル依存者と愛好家からなるギャンブラーに対して、少なからず否定的態度が存在する。そこで本研究では、シナリオ実験を行い、一般的に受容されやすい愛好家というサブカテゴリーを顕現化することで、ギャンブラーに対する潜在的態度が肯定化するか検討した。結果、愛好家のシナリオを読んだ群ではギャンブラーに対する潜在的態度が肯定化した。依存者に対する態度変容を促す研究への、知見の応用などについて論じた。

キーワード: ギャンブル愛好家, ギャンブル依存者, 潜在的態度, 潜在連合テスト

1. 序論

ギャンブル行為を日頃から行うギャンブラーの中には、ギャンブル依存者（以下、依存者と略す）とギャンブル愛好家（以下、愛好家と略す）が存在する。前者は臨床的に意味のある機能障害または苦痛を引き起こすに至る持続的かつ反復性のある問題賭博行動（高橋・大野, 2015）を行う人々を指す。一方で後者は、ギャンブルに対して適度な関心を持ち、賭けが成功する確率をある程度理解した上で、ギャンブルに臨む人々を指す（Abt, McGurrin, & Smith, 1985）。依存者に対して一般に否定的態度が存在し、これは依存者の自尊心低下や不安の増大といった、精神的健康に対する悪影響を及ぼす（Corrigan & Watson, 2002）ため、問題視されている。このような背景を踏まえ、どうすれば否定的態度を軽減できるか検討することは、依存者の精神的健康の維持や、適切な治療のために重要である。

一方、愛好家はギャンブルを適度に楽しむ人々として一般に受容されている（Campell & Smith, 2003）。依存者や愛好家に対する態度を検討した研究では、愛好家への態度の方が一般に肯定的であることが示されている（Donaldson, Langham, Best, & Browne, 2015; Palmer, Richardson, Heesacker, & DePue, 2018）。また、ギャンブラーというカテゴリーに対する印象は否

定的である（Horch & Hoidgins, 2013）ことから、ギャンブラーというカテゴリーに当てはまる典型的なステレオタイプは、賭博に依存し、のめりこんでいる否定的な姿であると言える。一方、愛好家への態度は肯定的であるが、ギャンブラーというカテゴリーの典型例であるとは認知されていないと考えられる。

しかし、日本における依存者と愛好家の数を比べると、愛好家も多く見られると言える。日本医療研究開発機構の調査（松下, 2017）によると、生涯において一度でもギャンブル依存症になったことがあると疑われる人の割合は、全人口のわずか3.6%に留まっていた。一方で、愛好家に関する全国的な統計は見当たらないものの、大学生におけるギャンブル行為への接触の実態を調査した高田・湯川（2011）では、参加者の18%が現在何らかのギャンブルを行っていると回答した。同様に、大学生のギャンブル経験の有無を尋ねた品川（2010）では、参加者の39%が少なくとも一度ギャンブルを行ったことがあると回答した。以上のことから、依存者と同様に、愛好家も多く存在すると考えられる。

このように、ギャンブラーの中には依存者と愛好家というサブカテゴリーが存在するが、愛好家という存在を顕現化する際、これがサブタイプ化される、あるいはサブグループ化される可能性がある。サブタイプ化は、対象がカテゴリーの中で例外的であると認識されることであり、ギャンブラー全体への態度を変化させないと考えられる（Weber & Crocker, 1983）。一方、サブグループ化は、他の集団成員と異なり何らかの類似点を持つ人々に関する情報を統合し、下位集団を作ること（Maurer, Park, & Rothbart, 1995）である。サブグループ化は、意識された対象の重要性が向上し、カテゴリー全体を新たな見方で捉えるようになるという点で肯定的である（Richards & Hewstone, 2001）。以上のことから、ギャンブラーにおける、典型的なステレオタイプに沿う依存者に相対して、反ステレオタイプの

な愛好家がサブグループ化されることで、ギャンブラー全体に対する態度が肯定化する可能性がある。

一方、これまでギャンブラーに対する態度は、主に顕在的指標によって測定されてきた (e.g., Ladouceur, Ferland, Vitaro, & Pelletier, 2005)。しかし、特に賭博行為は社会的にスティグマ化されており (Preston, Bernhard, Hunter, & Bybee, 1998)、顕在的指標は社会的望ましき傾向の影響を受けやすいと考えられる。以上のことから、本研究では、ギャンブラーに対する潜在的態度に着目し、潜在連合テスト (Implicit Association Test (IAT); Greenwald & Banaji, 1995) を単一カテゴリーに対して使用できるように変形した Single-Category Implicit Association Test (SC-IAT; Karpinski & Steinman, 2006) を用いて測定する。

本研究の目的は、依存者、愛好家というサブカテゴリーをシナリオによって顕現化し、その前後でギャンブラー全体に対する潜在的態度変化が生じるかどうか検討することである。

2. 方法

2.1 実験参加者

東京都内に在学する健常な大学生 40 名 (男性 20 名, 女性 20 名, 18-25 歳) が実験に参加した。平均年齢は男性 21.2 歳 ($SD = 1.39$), 女性 20.3 歳 ($SD = 1.65$) であった。本研究は東京大学倫理審査専門委員会の承認を受けて実施した (審査番号: 19-96)。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

2.2 シナリオ

典型的な依存者のシナリオと、それを改変した愛好

家 (依存症の基準に一切当てはまらない) についてのシナリオ (Horch & Hodgins, 2008; 付録を参照) を用いた。著者が日本語に翻訳し、バイリンガルの研究協力者に修正を依頼する形で、シナリオの妥当性を維持した。愛好家シナリオは依存者シナリオと同様の長さで、文章の数も等しくした。依存者および愛好家に対する印象をより強めるため、各シナリオの最後の一文は斜字、太字、波線によって強調した。

2.3 潜在的態度

Karpinski & Steinman (2006) に倣った SC-IAT によって、潜在的態度を測定した。SC-IAT は Windows10 の PC 上で OpenSesame3 を用いて作成した。SC-IAT の手続きについて Table 1 に示した。ポジティブな単語は「偉大な、豪華な、満足な、面白い、すばらしい」であり、ネガティブな単語は「邪悪な、憂鬱な、悲惨な、薄暗い、おそろしい」とした (e.g., Yi & Kanetkar, 2010)。ギャンブラーに関する単語は「ギャンブラー」のみを用いた (e.g., Ronay & Kim, 2006)。参加者は画面中央に出てきた単語が左側のカテゴリーに含まれるならばキーボードの E キーを、右側のカテゴリーに含まれるならば I キーを押して解答した。カテゴリー分けを正確かつ素早く行うように指示した。各条件は 1 回の練習試行 (24 語) と 2 回の本番試行 (24 語×2 回) から成っていた (Yi & Kanetkar, 2010)。

SC-IAT の得点化は Plotka, Blumenau, & Vinogradova (2016) に倣い、以下のように行った。まず、反応時間が 400 ミリ秒未満のもの、10000 ミリ秒より大きいもの、およびカテゴリー分けを誤った試行を分析から除外することとした。また、各ブロックの第一試行は大半の参加者の反応が大幅に遅れる傾向があったため、分析から除外した。そして IAT を用いた研究において標

Table 1

SC-IAT の手続き

ブロック	試行数	種類	左 (E キー)	右 (I キー)
p1	24	練習試行	ネガティブ	ポジティブ+ギャンブラー
p2	24	本番試行	ネガティブ	ポジティブ+ギャンブラー
p3	24	本番試行	ネガティブ	ポジティブ+ギャンブラー
n1	24	練習試行	ネガティブ+ギャンブラー	ポジティブ
n2	24	本番試行	ネガティブ+ギャンブラー	ポジティブ
n3	24	本番試行	ネガティブ+ギャンブラー	ポジティブ

注) ブロック p1, p2, p3 を先に行うか, n1, n2, n3 を先に行うかはランダムに決定された。

準的な方法である、D スコア

$$D = \frac{1}{2} \left(\frac{M_{n2} - M_{p2}}{SD_{n2p2}} + \frac{M_{n3} - M_{p3}}{SD_{n3p3}} \right)$$

を算出した。上式において、 M_i はブロック i の反応時間の平均、 SD_{ik} はブロック i, k を合わせた標準偏差である。D スコアは、ギャンブラーに対する潜在的態度が肯定的であるほど高得点となる指標である。 $|D| < 0.15$ では潜在的連合なし、 $0.15 < |D| < 0.35$ ではやや潜在的連合あり、 $0.35 < |D| < 0.60$ では中程度の潜在的連合あり、 $|D| > 0.60$ では強い潜在的連合ありと判断した (Plotka et al., 2016)。

2.4 顕在的態度

社会的距離感尺度 6 項目 (Martin, Pescosolido, & Tuch, 2000; 付録を参照) によって、シナリオの主人公 (依存者, 愛好家) に対する否定的態度を測定した。著者が日本語に翻訳し、バイリンガルの研究協力者に修正を依頼する形で、尺度の妥当性を維持した。「1: とてもしたい」から「4: とてもしたくない」の 4 件法で回答を求め、合計を得点とし ($\alpha = .86$), 得点が高いほど、顕在的態度が否定的であることを示した。

2.5 操作チェック

操作チェックとして、シナリオの主人公に関する 4 つの文章 (付録を参照) に対して、それぞれ 2 件法 (正しい, 正しくない) で尋ねた。両群において同じ項目を用いた。2 問以上誤答した参加者のデータは、シナリオの内容を正確に理解できていないものとみなし、分析から除外することとした。

2.6 デモグラフィック項目

参加者が最近行っている金銭を賭けたギャンブルについて、パチンコや競馬などの 10 種類 (「その他」を含む) のうち、最近行っているものとその実施頻度を尋ねた (高田・湯川, 2011)。加えて、国籍、性別、年齢を尋ねた。

2.7 実験手続き

参加者に対し、本研究では「ギャンブラーに関するカテゴリー分け課題」を実施すると伝えた。謝礼は図書カード 500 円分であった。参加者は参加同意書を提出したあと、ギャンブラーに関する SC-IAT に取り組んだ。

次に依存者 (依存者シナリオ群), あるいは愛好家 (愛好家シナリオ群) に関するシナリオのいずれかを読んだ。どちらの群に割り当てられるかはランダムに決定され、シナリオを読むにあたり、制限時間は設けなかった。なお、このシナリオで想定するギャンブルとは全て合法的なものであり、主人公は実在している人物と一切関係がないことを伝えた。十分に内容が理解出来たら、参加者は再度ギャンブラーに関する SC-IAT 課題に取り組んだ。2 回の SC-IAT において、ポジティブ条件とネガティブ条件の実施順はランダムに決定された。SC-IAT の全試行終了後、シナリオの主人公に関する社会的距離感尺度に回答した。最後に、シナリオの内容に関する項目 (操作チェック) とデモグラフィック項目に回答した。一人当たりの実験時間はおよそ 30 分であった。

3. 結果

3.1 実験参加者

分析には、統計ソフトウェア R (ver. 3.6.2) を用いた。課題および質問紙について、回答に不備がある者はいなかった。シナリオの内容に関する項目 (操作チェック) において、全参加者の正答率は 95.6% であり、半分以上誤答した者はいなかった。また、最近金銭を賭けたギャンブル経験があると回答した者は 3 名 (男性 3 名, 女性 0 名) であり、詳しい内容を尋ねたところ (複数回答可)、競馬と「その他」が 2 名ずつであった。最もギャンブル頻度が高かった者で週 2 回程度であり、ギャンブルに依存しているとは言えないものであった。

SC-IAT について、反応時間が 400 ミリ秒未満の試行が全試行の 10.2% を占め、20% を超える参加者は 7 名見られた。これは、先行研究で行われた SC-IAT では、1 つのカテゴリーに複数の刺激語を含むのが一般的であったのに対し、本研究では刺激語が「ギャンブラー」だけであり、課題が相対的に容易であったためと考えられる。よって本研究では、反応時間が 300 ミリ秒未満のもの、10000 ミリ秒より大きいもの、およびカテゴリー分けを誤った試行を分析から除外した。その結果、反応時間によって除外された試行は全体の 0.24% であり、2% 以上の参加者はいなかった。カテゴリー分けの誤答率は全体で 3.56% であり、10% 以上の参加者はいなかった。以上を考慮し、40 名全員のデータを分析に用いた。

3.2 顕在的態度

社会的距離感の平均点は、依存者シナリオ群で 20.3 ($SD = 1.37$)、愛好家シナリオ群で 14.6 ($SD = 2.85$) であった。シナリオ (依存者シナリオ, 愛好家シナリオ) と性別を参加者間要因の独立変数, 社会的距離感を従属変数とした 2×2 の分散分析を行ったところ (Figure 1), シナリオの主効果が見られた ($F(1, 36) = 65.6, p < .001$)。一方, 性別の主効果および, シナリオ \times 性別の交互作用効果はいずれも有意なものではなく (順に $F(1, 36) = 0.42, p = .52$; $F(1, 36) = 2.72, p = .11$), 両群ともに有意な男女差は見られなかった。

3.3 潜在的態度

シナリオを読む前における, 全参加者の D スコアの平均は -0.08 ($|D| < 0.15$) であり, ギャンブラーに対する潜在的態度は肯定的でも否定的でもなかった。次に, シナリオ (依存者シナリオ, 愛好家シナリオ) を参加者間要因の独立変数, 測定時点 (シナリオ前後) を参加者内要因の独立変数, D スコアを従属変数とした 2×2 の分散分析を行ったところ (Figure 2), シナリオ \times 測定時点の交互作用が見られた ($F(1, 38) = 5.70, p = .02, \eta^2 = .08$)。一方, シナリオと測定時点の主効果はいずれも見られなかった (順に, $F(1, 38) = 0.62, p = .43$; $F(1, 38) = 0.04, p = .85$)。シナリオ \times 測定時点の交互作用について詳細に検討するため, それぞれの単純主効果の検定を行ったところ, 愛好家シナリオ群において, シナリオを読む前より読んだ後のほうが高いという有意差が見られた

($t(19) = 2.17, p = .04, d = .40, 95\%CI = [-0.04, 0.89]$)。すなわち, 愛好家シナリオ群では潜在的態度が肯定化していた。一方, 依存者シナリオ群では, シナリオ前後の有意差は見られなかった ($t(19) = 1.36, p = .19$)。また, シナリオを読む前において, 依存者シナリオ群と愛好家シナリオ群の有意差は見られなかった ($t(37.7) = 1.19, p = .24$) が, シナリオを読んだ後において愛好家シナリオ群のほうが高いという有意差が見られた ($t(37.9) = 2.46, p = .02, d = .78, 95\%CI = [0.16, 1.49]$)。

4. 考察

本研究では, 愛好家サブカテゴリーに注目させた場合, ギャンブラーへの潜在的態度が肯定化するかどうか検討した。その結果, 愛好家というサブカテゴリーを顕現化することが, 潜在的態度に肯定的影響を与えることが示された。また, 顕在的態度は愛好家よりも依存者に対して否定的であり, 先行研究 (Donaldson et al., 2015; Palmer et al., 2018) と同様の結果であった。

シナリオ前後の D スコアの変化より, 愛好家シナリオ群において, 参加者のギャンブラーに対する潜在的態度が肯定化したと考えられる。これは, ギャンブラーの中に愛好家という肯定的なサブグループが形成され, 愛好家の相対的な重要性が向上し, カテゴリー全体に対する見方が変化した結果である (Richards & Hewstone, 2001) と考えられる。以上の知見は, 大学の心理学関連の講義などの教育現場で, 依存者への否定

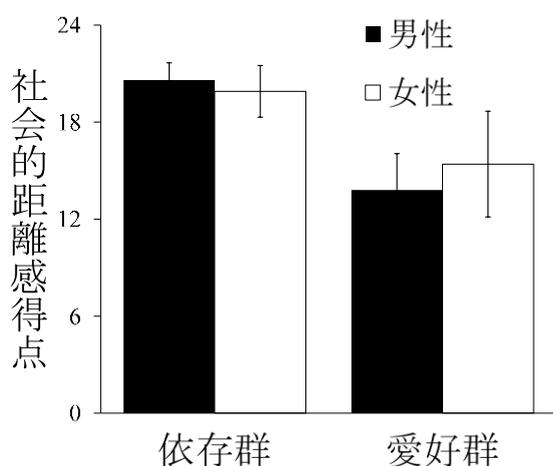


Figure 1. 各群の性別ごとの社会的距離感得点
注) 依存群は依存者シナリオ群, 愛好群は愛好家シナリオ群を表す。エラーバーは標準偏差を表す。

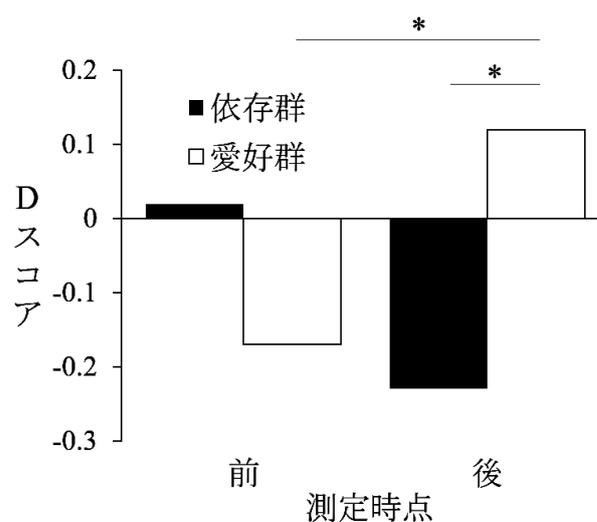


Figure 2. シナリオ前後のDスコア。
注) 依存群は依存者シナリオ群, 愛好群は愛好家シナリオ群を表す。* $p < .05$

的態度の変容を促す介入として活用できると考える。例えば、依存者と肯定的な接触機会をもつことは否定的態度の軽減に有効であると言われているが (e.g., Hing, Russell, & Gainsbury, 2016; Holmes, Corrigan, Williams, Canar, & Kubiak, 1999), 依存者の知人がいない人は、このような接触機会をもつのが難しい。それに比べ、本研究のように、ギャンブラーの中のギャンブル愛好家を強調するという手法は容易で、より多くの人に対して同時に実施できることから、利用可能性が高いと考えられる。

本研究では、愛好家サブカテゴリーに関して、潜在的指標を用いた知見を得ることができたが、以下のような限界点も存在する。第一に、シナリオについて参加者がどの程度リアリティを持って想像できていたかを確認していない点である。参加者がシナリオから抱くイメージは、個人差が大きい可能性がある。よって、呈示された場面に対してどの程度具体的に想像したかという側面も、今後の研究で検討する必要があるだろう。第二に、本研究は、大学生 40 名をサンプルとしており、より一般的なサンプルによる追試が必要であるという点である。大学生は他の世代に比べてギャンブル依存症に陥りやすい (Horch & Hodgins, 2013) が、彼らが周囲に援助を要請する際に妨げとなる否定的態度は、同世代の若者から向けられるものだけではない。よって、他世代の人々が抱く否定的態度の在り方についても検討していくことが重要だと考えられる。第三に、本研究の手続きを、依存者に対して実施した場合について検討できていない点である。本研究では、健常な参加者が保持する潜在的態度の変容に着目したが、依存者自身においても何らかの効果が見られる可能性があり、今後検討していく余地があると考えられる。

以上のような限界点はあるが、本研究で得られた知見は依存者への否定的態度の軽減につながるものであると言える。依存者への態度を考察する際に、愛好家というサブカテゴリーを利用するという観点は、これまで十分な検討が為されてこなかった。よって、本研究の知見をより詳細に分析し、実用的な場面で活用することを目指した今後の研究が求められるだろう。

文献

Abt, V., McGurrin, M. C., & Smith, J. F. (1985). Toward a Synoptic Model of Gambling Behavior. *Journal of Gambling Behavior*, 1(2), 79–88. <https://doi.org/10.1007/BF01019860>
American Psychiatric Association. (2013). *Desk Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-5*. Arlington, VA. (米国精神医

学会 高橋 三郎・大野 裕 (監訳) (2015). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院
Campbell, C. S., & Smith, G. J. (2003). Gambling in Canada—From Vice to Disease to Responsibility: A Negotiated History. *Canadian Bulletin of Medical History*, 20(1), 121–149. <https://doi.org/10.3138/cbmh.20.1.121>
Corrigan, P. W., & Watson, A. C. (2002). The Paradox of Self-Stigma and Mental Illness. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 9(1), 35–53. <https://doi.org/10.1093/clipsy.9.1.35>
Donaldson, P., Langham, E., Best, T., & Browne, M. (2015). Validation of the Gambling Perceived Stigma Scale (GPSS) and the Gambling Experienced Stigma Scale (GESS). *Journal of Gambling Issues*, 31, 163–200. <https://doi.org/10.4309/jgi.2015.31.8>
Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit Social Cognition: Attitudes, Self-Esteem, and Stereotypes. *Psychological Review*, 102(1), 4–27. <https://doi.org/10.1037/0033-295x.102.1.4>
Hing, N., Russell, A. M. T., & Gainsbury, S. M. (2016). Unpacking the Public Stigma of Problem Gambling: The Process of Stigma Creation and Predictors of Social Distancing. *Journal of Behavioral Addictions*, 5(3), 448–456. <https://doi.org/10.1556/2006.5.2016.057>
Holmes, E. P., Corrigan, P. W., Williams, P., Canar, J., & Kubiak, M. A. (1999). Changing Attitudes About Schizophrenia. *Schizophrenia Bulletin*, 25(3), 447–456. <https://doi.org/10.1093/oxfordjournals.schbul.a033392>
Horch, J. D., & Hodgins, D. C. (2008). Public Stigma of Disordered Gambling: Social Distance, Dangerousness, and Familiarity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 27(5), 505–528. <https://doi.org/10.1521/jscp.2008.27.5.505>
Horch, J. D., & Hodgins, D. C. (2013). Stereotypes of Problem Gambling. *Journal of Gambling Issues*, 28, 1–19. <https://doi.org/10.4309/jgi.2013.28.10>
Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The Single Category Implicit Association Test as a Measure of Implicit Social Cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 16–32. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.91.1.16>
Ladouceur, R., Ferland, F., Vitaro, F., & Pelletier, O. (2005). Modifying youths' perception toward pathological gamblers. *Addictive Behaviors*, 30(2), 351–354. <https://doi.org/10.1016/j.addbeh.2004.05.002>
Martin, J. K., Pescosolido, B. A., & Tuch, S. A. (2000). Of Fear and Loathing: The Role of 'Disturbing Behavior,' Labels, and Causal Attributions in Shaping Public Attitudes toward People with Mental Illness. *Journal of Health and Social Behavior*, 41(2), 208–223. <https://doi.org/10.2307/2676306>
松下 幸生 (2017). 国内のギャンブル等依存に関する疫学調査—全国調査結果の中間とりまとめ 久里浜医療センター Retrieved from https://kurihama.hosp.go.jp/about/pdf/info_20171004.pdf (2020年4月27日)
Maurer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69(5), 812–824. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.69.5.812>
Palmer, B. A., Richardson, E. J., Heesacker, M., & DePue, M. K. (2018). Public Stigma and the Label of Gambling Disorder: Does it Make a Difference? *Journal of Gambling Studies*, 34(4), 1281–1291. <https://doi.org/10.1007/s10899-017-9735-x>
Plotka, I., Blumenau, N., & Vinogradova, Z. (2016). Research of Implicit Attitudes towards Gambling for Gamblers and Non-gamblers. *Society. Integration. Education. Proceedings of the International Scientific Conference*, 1, 498–514. <https://doi.org/10.17770/sic2016vol1.1529>
Preston, F. W., Bernhard, B. J., Hunter, R. E., & Bybee, S. L. (1998). Gambling as stigmatized behavior: Regional relabeling and the law. *The Annals of the American Academy of Political and*

- Social Science*, 556(1), 186-196. <https://doi.org/10.1177/0002716298556001014>
- Richards, Z., & Hewstone, M. (2001). Subtyping and Subgrouping: Processes for Prevention and Promotion of Stereotype Change. *Personality and Social Psychology Review*, 5(1), 52-73. https://doi.org/10.1207/S15327957PSPR0501_4
- Ronay, R., & Kim, D. Y. (2006). Gender Differences in Explicit and Implicit Risk Attitudes: A Socially Facilitated Phenomenon. *British Journal of Social Psychology*, 45(2), 397-419. <https://doi.org/10.1348/014466605X66420>
- 品川 由佳 (2010). 大学生のギャンブル依存に関する調査 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 26, 51-57.
- 高田 琢弘・湯川 進太郎 (2011). 大学生のギャンブル接触の実態とパーソナリティ特性 筑波大学心理学研究, 42, 35-41.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive Processes in the Revision of Stereotypic Beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45(5), 961-977. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.45.5.961>
- Yi, S., & Kanetkar, V. (2010). Implicit Measures of Attitudes toward Gambling: An Exploratory Study. *Journal of Gambling Issues*, 24, 140-163. <https://doi.org/10.4309/2010.24.9>

- (4) 太郎と仕事場で一緒に働く。
 (5) 太郎のような人々のための集合支援住宅が近所にできる。
 (6) 太郎が家族の一員となる。

シナリオの内容に関する項目

先ほど読んでいただいた太郎についてのシナリオにおいて、以下の項目にお答えください。

(2 件法; 1 正しい, 2 正しくない)

- (1) 太郎は大学生である。
 (2) 太郎は先月いつもより多くの金額を賭けた。
 (3) 太郎はなかなか自力でギャンブルを止めることができていない。
 (4) 太郎の家族は、太郎に経済的な援助をする必要がない。

付録

依存者に関するシナリオ (Horch & Hodgins, 2008)

太郎はあなたの大学の学生です。先月太郎はいつもより多くのお金を賭けるようになりました。同じような興奮を得るためには、以前よりももっとギャンブルをしなければならないことにも彼は気づいていました。彼は何度かギャンブルを減らそうとしたり止めたりしようとしてしましたが、その度に興奮して眠れなくなり、再びギャンブルを始めました。彼の家族は、彼がひどく変わってしまったことや、彼が誰なのかさえ分からなくなったような気がするかと訴えています。また、経済的な援助をしなければならないことに憤りを感じ始めています。 ギャンブラーというカテゴリーの中には、太郎のようなギャンブル依存者が非常に多く存在します。

愛好家に関するシナリオ (Horch & Hodgins (2008) のものを改変)

太郎はあなたの大学の学生です。先月太郎はいつも通りの金額で賭けを行いました。趣味として、以前と変わらずギャンブルを楽しんでいます。彼は学業やサークルが忙しい時はギャンブルを減らしたり止めたりすることができており、時間に余裕があるときに節度を持ってギャンブルをするようにしています。彼の家族は彼が自分を律しながらギャンブルを楽しんでいる様子を見守っています。また、経済的な援助をする必要がない状態で、一切憤りを感じることもありません。 ギャンブラーというカテゴリーの中には、太郎のようなギャンブルを趣味として程よく楽しめる人が非常に多く存在します。

社会的距離感尺度 (Martin et al., 2000)

あなたが以下の状況になったら、どれくらいそれをしたと思うと思いますか？

(4 件法; 1 とてもしたい, 2 たぶんしたい, 3 たぶんしたくない, 4 とてもしたくない)

- (1) 太郎の家の隣に引っ越す。
 (2) 太郎と友達になる。
 (3) 太郎と夕方から夜にかけて一緒に過ごす。